

『第二の性』の歴史的射程

——フェミニズム「経済学批判」に向かって (4) ——

青 柳 和 身

- I. 課題意識
- II. 問と方法
- III. 構成とメッセージ (1) …… (以上第 34 巻第 1 号)
- IV. 構成とメッセージ (2) …… (以上第 34 巻第 2 号)
 同上〔つづき〕
- V. 生物学的運命 …… (以上第 34 巻第 3 号)
 同上〔つづき〕 …… (以下本号)
- VI. 労働論的運命

V. 生物学的運命 [承前]

2. ミレットとファイアストーン

オーガズム論争はコミュニケーションにかかわる重大な問題を提起しているように思われる。それは、セクシュアリティに直接かかわることばとして「オーガズム」, 「性行為 (異性愛/同性愛)」, 「(女/男) 身体」だけでなく, 『第二の性』II 巻第三部で取りあげられた「自己」, 「愛」, 「神」または神の観念の述語 (属性) としての「人間(性)」といったことばも含め, その具体的内容が生物学的異性間で異なるだけでなく, 生物学的同性間でも, 個人的性体験の相違, すなわち「個人のドラマ」(引用文^⑩) の相違によって異なっ

たものになりうること³³⁾、またあることばがセクシュアリティと関連性があるかぎり、「同感 sympathy」による意味内容の共有化の可能性が制約され、それが諸個人間の「深刻な誤解の原因」(引用文㉑)となりうるという問題である³⁴⁾。このことは、言語的コミュニケーション疎外が、「経済」的利害等による「うそをつく可能性」のみからではなく³⁵⁾、より親密な人間関係と想定されている「生活」領域における誠実なコミュニケーションの場合でも生じる可能性があることを意味している。オーガズム論争は、引用文㉔および㉔aで指摘されているセクシュアリティにかんするコミュニケーション疎外が、現代人にとっていかに深刻な意味をもっているかということを再確認させるものである。

以上の問題を考慮すれば、フェミニズム諸理論の相違と論争の問題も、性的コミュニケーション疎外を通じた「生活」領域での言語的コミュニケーション疎外という視角からも検討される必要がある。この点を前提して、『第二の性』で提起された両性の社会的行動差を規定する「土台」としてのセクシュアリティという問題を、フェミニズムにとって第一次の問題として受けとめたミレットとファイアストーンの所説を検討しよう。

ミレット『性の政治(学)』は、1部「性の政治」、2部「歴史的背景」、3部「文学への反映」の三部構成となっているが、理論の部である1部を中心に検討を行おう。

まず導入部では三人の男性作家による性描写の例を提示しながら、性行為という私的領域内部にも支配被支配関係としての「権力構造」が存在することが指摘され、これに「性の政治」という概念が適用されている。ここで「政治」とは「一群の人間が他の一群の人間に支配される仕組み」であり、「支配」が中核をなす概念である。「性(別)」(sex)とは生得の権利による支配被支配を規定する古くから普遍的に存在する地位カテゴリーであり、この地位によって成立する人間関係が「父権制」(patriarchy 家長制)であると規定される³⁶⁾。

父権制は、合衆国やヨーロッパでは弱められたとは言え、現代社会にも厳然と存在する制度であり、暴力によって維持される面もあるが、イデオロギーの条件づけによる性別社会化(教育)によって獲得される「気質」(心理学的構成要素)、「役割」(社会学的構成要素)というパーソナリティによって社会的に合意化された「地位」(政治的構成要素)関係である。

性別「気質」とは、何ら生物学的基盤をもたず、もっぱら家庭と社会の教育によって形成されるものであり、ストーリーによって実証的根拠をもって提示された「ジェンダー」概念³⁷⁾が、「気質」の説明的概念として導入されている。

性別「役割」とは、父権制の基本的制度である家族制度として実現され、また家族は、他の学習源とともに未成年を社会化し、性別「気質」、「役割」、「地位」的態度を養成する機能をもち、女性は家族内で被扶養の代償として家事労働と性的配偶者としての「役割」を果たす。

性別「地位」は、経済的階級関係によって見えにくくされているが、性別収入格差・教育格差として貫徹している。

父権制の多様な側面は、同時にまた両性の心理に作用し、父権制のイデオロギーの内面化が実現される。

政治、経済、法律等の諸制度は、父権制的イデオロギーとそれによる社会化という「下部構造 substructure」にたいし、「上部構造 superstructure」を形成している³⁸⁾。したがって女性解放としての「性革命」は、父権制的単婚を脅かす性的行為(同性愛、「私生児」、婚前・婚外性愛)にたいする禁止やタブーを打破し、男性優位イデオロギーとそれによる社会化の撤廃という文化革命を第一義的内容とするものである。

以上の所説を『第二の性』と比較しよう。ミレットの所説は、「ジェンダー」概念を実証的根拠をもってフェミニズム理論に導入したこと、「セクシュアリティ」がたんなる性的心理や純生物学的問題としてではなく、実践的な人間自然的関係行為として、人間の社会的行動や社会的諸関係の基礎と

して把握されていること、現代文学に反映された性的行為は、性的主体としての男性が、女性を性的に客体化する行為として把握されており、「主客的性関係」の特質が反映されていること、これらの点でボーヴォワールの「史的唯物論」の継承ないし、一步前進と評価することができる。

しかし研究対象としての現代社会を検討する方法は、『第二の性』Ⅱ巻「体験」が前提している歴史科学的態度、すなわち研究対象の歴史的限定性の自覚という態度とは異なっており、それが『性の政治学』独自の論理展開をもたらしている。

「性の政治学の理論」の導入部では、二重の論理操作によって前近代的歴史概念とされていた「父権制（家父長制）」が現代社会の男女の性的行為と性別関係に適用され、それによって概念規定されている。それは、第一に、現代の歴史学・社会学の文献から、「政治」、「権力」、「支配」、「父権制」という用語を、文脈を抜きにした「定義」として抽出し³⁹⁾、第二に、現代社会の中から社会の総体性（文脈）を捨象して抽出された男女の性的行為と性別関係の特質の「定義」として、それらの用語を適用するという論理操作が行われている。こうして何ら歴史的検討を行うことなく、現在は「過去」から、過去は「現在」から類推され、その結果質的变化を伴わない量的変化としての「歴史」像が得られることになる。「父権制」は、前近代と近代を貫通する制度であり、ただ父権制的支配の程度差のみがあるとする結論は、歴史的検討の結果ではなく、最初の論理操作自体に含まれていると言える。

このような歴史観を前提した場合、「父権制」は、封建的経済制度、資本主義的経済制度等を貫く基礎的關係すなわち「下部構造」として位置づけられ、性別関係は階級関係の「下部構造」として位置づけられるのは論理必然的帰結である。この場合、ボーヴォワールの「史的唯物論」の用語（「下部構造」「上部構造」）が使われているが、その内容は異質なものとなっている。なぜなら『第二の性』の核心的問題提起として、人間自然的関係行為（セクシュアリティ）と土地自然的関係行為（労働）との「下部構造」自体における

関係はいかなるものであるかという「ボーヴォワールの問題」は、解決されたのではなく、解消されてしまったからである。ボーヴォワールは、後に主婦の疎外と労働者の疎外の関係について触れながら、「ケイト・ミレット……の本を読んでも、その点についてはまだ十分研究されていません」⁴⁰⁾と述べているが、まさにこの問題を指摘していると言える。

現代社会におけるセクシュアリティと労働の関係を検討するためには、まだ十分に研究されていないセクシュアリティの問題を、さしあたり現代に特有な歴史限定的問題として批判的に検討する必要がある。その場合、『第二の性』における「不感症」の分析と、20世紀における性言説としての精神分析およびキンゼイ報告の両面批判とは、見逃すことのできない指摘である。ミレットは、このような指摘を含む『第二の性』との十分な内在的コミュニケーションを行うことなく、歴史貫通的な「性の政治」理論へと飛躍した。このコミュニケーション疎外には、個人的性体験のあり方とともに、マスターズやアン・コートの生物学的運命論が、疎外の独自要因として作用していたと言えよう⁴¹⁾。この場合、「性器 (陰)」ということだけでなく、性的行為と関連があるかぎり、「性」、「政治」、「支配」、「父権制」ということばも含め、ボーヴォワールとは異なる独自の意味内容が論理展開の前提として内包されていたと言える。

ファイアストーン『性の弁証法』は、諸論文の集成であるが、1章「性の弁証法」、ウーマン・リブ女性解放運動史を検討した2章、フロイト理論の批判的摂取による性别人格形成と性愛を論じた3～7章、男性文化と文化史を論じた8～9章、エコロジーと女性解放の関連性を論じた10章、および「結論——最終的な革命」から構成されている。ファイアストーンの基本的見解が明示的に提示されている1章と結論を中心に検討しよう。

1章の導入部では「性」問題を検討する方法がマルクス＝エンゲルスの史的唯物論と『第二の性』の検討を通じて次のように提示されている。

マルクス＝エンゲルスは、生産と交換にもとづく経済的階級を社会構造の

「土台」として把握しているが、人間の生殖にもとづく「性(別)」の「階級性」については偶然的な洞察を加えているにすぎない。「性」を性心理等のアプリオリなカテゴリーで考察するのではなく、「性そのもの」を「土台」に位置づけて、マルクス主義的「史的唯物論」を包摂するような史的唯物論的分析が女性解放理論には不可欠である。ボーヴォワールはこの「分析に迫った——いや多分それをなしとげた——唯一人の人」⁴²⁾であり、『第二の性』は女性解放論を歴史的土台の上に基礎づけようとした著作である。しかしこの著作では実存主義的カテゴリーをアプリオリに仮定して分析が行われているが、このような哲学的カテゴリーは性差別の分析に不可欠なものではない⁴³⁾。むしろ哲学的カテゴリー自体が歴史から生じるというマルクス＝エンゲルスの方法によって分析する必要がある。

ファイアストーンは、以上のような方法的検討を前提して、過去から現在まで歴史貫通的に存在した基本的生殖単位(男と女と子供)としての「生物学的家族」を、歴史貫通的な「性的階級」を規定する「生物学的事実」として析出し、それは次の四つの要素から構成されるものであるとする。

1. パース・コントロール出現以前には、絶えざる出産、授乳、育児の負担等の結果、女性の肉体的生存の男性依存が不可避であったこと。この女性身体への「生物学的専制」は現代も存在していること。
2. 幼児の肉体的生存の大人への依存が不可避であること。
3. 母子の相互依存関係の存在とそれによる女性と幼児の心理形成。
4. 両性間の生殖機能の自然的相違が性別分業の基礎となり、それが経済的階級差別、文化的(性的)階級差別の原因となっていること。

この生物学的家族は現代でも結婚制度を通じて存在しており、社会の経済的および文化的「上部構造 superstructure」の「土台 base」を形成しているため、上部構造の変革のみでは階級を廃止できない。性的下層階級(女性)による「性革命」すなわち出産と育児に関する新しいテクノロジーと社会機構を含めた女性による生殖のコントロールの掌握と、それを通じた自己の身

体にたいする「所有権」の回復による性的階級の廃止が、上部構造としての経済的階級の廃止の基礎となる⁴⁴⁾。

性革命の最終目標は、(1) 人工生殖を含むあらゆる手段を利用した、生物学的生殖の暴虐からの女性の解放と子供の育成役割の社会全体への拡散、(2) 経済的独立を含む女性と子供の完全な独立、(3) 女性と子供の社会生活への全面的組み入れ、(4) すべての女性と子供の性的自由、および家族の死滅と排他的母子結合の解消による新たな人格形成を前提した「多形的」性関係(「近親相姦」タブー、同性愛タブー、子供の性行為禁止の解消を前提した非排他的性関係)の形成である。ソヴィエトのコンミュンやイスラエルのキブツなどの失敗の原因は、家族の「盲目的排他主義」、とくに排他的母子結合を解消できなかったことである。性革命の最終目標の達成は、性・生殖様式、子供の育成様式、居住・生活様式等の過渡的諸段階を経由する「家族制度のゆるやかな死滅」過程として実現されるであろう⁴⁵⁾。

以上の所説をミレットの所説と比較しつつ特徴づけを行おう。両者は共にセクシュアリティに規定された「性的階級」(性別関係)を経済的階級の「土台」または「下部構造」と規定している点では共通性があるが、性差別を規定するセクシュアリティの内容把握の点で決定的な相違が内包されている。

ミレットは性的行為それ自体のあり方を中心として性差別を把握しているのにたいし、ファイアストーンは「生殖」を中心として性差別を把握している。また性革命の展望もその相違に規定されて、ミレットは生殖的異性愛関係外部の性関係(同性愛や婚前・婚外性関係)の「政治」(文化)的承認を中心課題として捉えているのにたいし、ファイアストーンは、それらを包摂しながらも、むしろ生殖的契機を含む異性愛関係自体の変革を中心課題として捉えている⁴⁶⁾。

「父権制」または男性支配制については、両者共に前近代と近代を貫く歴史貫通的構造と理解しているが、ミレットは近代を男性支配の相対的弱化と捉えているのにたいし、ファイアストーンは近代における「子供中心家族」(ア

リエス)としての近代的核家族の成立を男性支配制の強化と捉えている⁴⁷⁾。

男性支配制(性差別)を規定する究極要因は、ミレットの場合「イデオロギー」として抽象的に規定されているのにたいし、ファイアストーンの場合、男女身体の生殖的非対称性に条件づけられた男女の自己身体「所有権」の非対称性の問題として具体的に規定されている。

全体として両者の相違は『第二の性』の継承のあり方と関連している。ファイアストーンの所説を『第二の性』と比較しよう。

ファイアストーンは、『第二の性』の問題提起の核心をセクシュアリティを基礎とした「史的唯物論」の再構成と捉えたこと、その場合解明されるべき中心問題は、形式的平等を前提した近代社会における性差別を規定する唯物論的基礎の解明であると捉えたことは、『第二の性』の中心的問題を何らの誤解を含まずに受けとめていると言える。ファイアストーンが提示している生殖的身体能力の「所有権」問題は、近代社会の形式的平等の背後にある実質的不平等として、「財産所有」を基礎とする「経済」的階級差別とは別次元の要因である。また労働能力としての身体的・精神的能力「所有」⁴⁸⁾とは別次元の生殖にかかわる身体的・精神的能力の「所有」問題という性別不平等要因を析出しており、これは『第二の性』の問題提起にたいする明確な解答となりうるものである。

しかし「土台」内部におけるセクシュアリティ(性・生殖様式)と労働の関係という「ボーヴォワールの問題」自体は、解決されたのではなく、解消されてしまった。ファイアストーンは、二種類の身体的・精神的能力「所有」問題について、「土台」の内部問題として両者の相互関係を考察するのではなく、性・生殖は「土台」問題、労働は「上部構造」問題として両者を分離してしまっただけである⁴⁹⁾。

「ボーヴォワールの問題」とは異なったかたちでの「問題」解消要因は何であろうか。

その直接的原因是、生殖様式の歴史的検討を行うことなく、生殖問題を

「生物学的家族」という歴史貫通の概念に還元してしまったことであり、この点については『第二の性』の「歴史」叙述(歴史貫通の生殖コントロール欠如論)自体にも原因がある。しかしこれらの直接的な原因は、ボーヴォワールの「問題」提起とファイアストーンの「問題」解消との間のコミュニケーション疎外の根本要因とはなりえない。

両者の間の決定的な相違は、フロイトやキンゼイ(またはマスターズ)の性言説の評価にある。ボーヴォワールの場合、フロイトの功績を認めつつも、その性器観およびキンゼイの性器観にたいしては確信的な両面批判があるが⁵⁰⁾、ファイアストーンにはこの確信が欠如している⁵¹⁾。ボーヴォワールは、フロイトやキンゼイの性器観を、現代における性的疎外状況と両性のコミュニケーション疎外を反映した男性的「神話」と見ており、この見解は本文の叙述のみならず、II巻末尾の文、I巻序文(引用文①)、II巻序文の時代限定(「現状」という決定的重要性を付与された指摘となってあらわれている。ファイアストーンは、フロイトやマスターズの性言説をその基本的部分にかんするかぎり「神話」とは見なしていない。3~7章および8~9章の叙述は、基本的にフロイト的視点としての男女の人格的(文化的)二性性の歴史貫通の適用であり、「生物学的家族」はこのような「歴史」認識を前提として措定されたものである。結局、男性的性言説にたいする明晰な批判の有無が両者のコミュニケーション疎外の根本的要因になったと考えられる。

ファイアストーンは、アリエスの著作の検討を通じて「近代家族」の形成という歴史的問題に接近した⁵²⁾。このことはファイアストーンの方法論からすれば、「近代的セクシュアリティ(性・生殖様式)」の形成という歴史的問題への接近を意味している。また生殖的身体所有権の「回復」という主張には、その歴史的「剝奪」という観点も含まれる。それにもかかわらず歴史貫通的「生物学的家族」という概念化に帰結したことは、以上の根本的要因が優越的に作用した結果であったと言える。この場合、「生物学」、「家族」、「階級」、「土台(下部構造)」といったことばは、性的行為との関連性がある

かぎり、ボーヴォワールのことばとは異なった意味が当初から内包されており、結局それがファイアストーンの独自理論の形成因子になったと言える。

〔注〕

- 33) これは、「女」の性的身体をもつ者が、性的他者とその性的行為の相違によって異なった性体験をすることと、「男」の性的身体をもつ者が性的他者とその性的行為の相違によって異なった性体験をすることの両者を含んでいる。
- 34) 最新のモア・リポートでは、女性の（異性愛）セックス・オーガズム体験にかんして (a)「かならず得られる / たいてい得られる」は 38.7%, (b)「ときどき得られる」は 20.8%, (c)「めったに得られない / 得られない」等は 39.8% という分散性を示しており、この分散性は 20 年前の調査とあまり変わっていない ((a)は 20 年前の調査より減少している)。また自己身体自体を「不感症」と断定的に捉えている女性の例もある。オーガズムの「フリ」については 20 年前の調査より減少しているが、全く「フリ」をしない女性は 42.2% とあい変わらず少数派である。ここには「異性」間のコミュニケーション疎外だけでなく、「同性」諸個人の異なった性「体験」と、それによる自己身体観とセクシュアリティ観の相違が内包されている。小形桜子『モア・リポートの 20 年』集英社、2001 年、166-186 ページ。
- 35) 尾関周二『言語と人間』大月書店、1983 年（引用部分は 186-194 ページ）、同『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店、1989 年参照。この著作は労働と言語的「相互行為」という人間の基本的実践行為の区別と連関、労働疎外とコミュニケーション疎外の関連性などが検討され、言語問題にかんする秀れた内容を含んでいるが、残念ながら言語的コミュニケーション疎外と性的コミュニケーション疎外との関連性という問題視角からの検討は行われていない。
- 36) Kate Millet, *Sexual Politics*, Doubleday: New York, 1970, p.24.
- 37) Robert J. Stoller, *Sex and Gender*, Science House: New York, 1968, ロバート J. ストラー『性と性別』岩崎学術出版社、1973 年。
- 38) Millet, *op. cit.*, p.64, ミレット前掲書、132 ページ。
- 39) 論理操作は、ウェーバーの「支配 Herrschaft」用語を中軸として行われているが、これは *Wirtschaft und Gesellschaft* の部分訳からの抽出である（前掲書、69-73 ページ）。
- 40) シュヴァルツァー前掲書、49 ページ。
- 41) ミレットは、陰性交によるオーガズムを、クリトリス刺激のみで生じるオーガズムとは「おそらく異なった経験的性格のもの」と認めながら、結局クリトリス等の間接刺激効果というマスターズ（アン・コート）的性器観を再確認している（前掲

書, 218 ページ)。この生物学的性器観の場合, このような性器観自体の歴史的生成と性的行為の変化という問題は検討課題にはなりえない。ここには, 男女性器の生物学的構造差から, 陰性交は基本的に男性能動型運動行為であると捉える「生物学」的視点が潜んでいるように思われる。

- 42) ファイアストーン前掲書, 13 ページ。
- 43) これは後のボーヴォワール自身の『第二の性』にたいする自己評価の踏襲でもある。シモース・ド・ボーヴォワール『或る戦後』紀伊国屋書店, 1965 年 (原書 1963 年), (上巻) 210 ページ。
- 44) Shulamith Firestone, *The Dialectic of Sex: The Case for Feminist Revolution*, Morrow Quill Paperbacks: New York, 1970, pp.8-13, ファイアストーン前掲書, 14-19 ページ。
- 45) ファイアストーン前掲書, 254-294 ページ。
- 46) ファイアストーンは, レズビアン・フェミニズムにたいしては, 異性愛自体の性差別関係を変革するものではありえないとして批判的であり, これはボーヴォワールと共通した認識である。また家族制度の死滅による将来の「多形的」性関係は, 同性愛を排除するものではないが, 肉体的「適合」性から異性愛関係に落ち着くと予測されている。前掲『女たちから女たちへ』, 114 ページ (なおミレットの性革命論として同書 83-84 ページもあわせ参照), ファイアストーン前掲書, 292 ページ。
- 47) ファイアストーン前掲書, 90-130 ページ。
- 48) 『全集』第 23a 巻 (『資本論』第一巻), 220 ページ。
- 49) ボーヴォワールは, ファイアストーンが女性解放と子供の解放を結びつけたことを高く評価しながらも, 主婦の疎外と労働者の疎外との関係が, ミレットと同じく, 十分に研究されていないと評価している。シュヴァルツァー前掲書, 49 ページ。
- 50) 前掲『或る戦後』でボーヴォワールは, 『第二の性』の自己評価として, I 巻はもっと唯物論的の叙述の方が望ましいが, II 巻の叙述は長年抱き続けてきた関心にもとづくものであり, 「自分が書いたものを今でもその通りだと思っている」と述べている (上巻, 204, 210 ページ)。
- 51) ファイアストーンの性器観には総じてあいまいなものがある。同性愛より異性愛の方が身体「適合的」と判断しながらも, マスターズの性器観には明白な判断を下してはいない。また子供の性別人格形成論としてフロイトの理論を歴史貫通的「生物学的家族」の要素として導入しているが, その際フロイトの生物学的性器観 (男性能動・女性受動) の明白な批判を行っているわけでもない。ファイアストーン前掲書, 52-89 ページ。

- 52) Firestone, *op. cit.*, pp. 84-103, ファイアストーン前掲書, 93-112 ページ, Philippe Aries, *Centuries of Childhood: A Social History of Family Life*, 1962, フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』みすず書房, 1980 年 (原書 1960 年)。

VI. 労働論的運命

「ラディカル」フェミニズムは、ミレットにせよファイアストーンにせよ、マルクス主義の「史的唯物論」の根本的な再構成という性格をもって登場したが、「マルクス主義」フェミニズムはいかなる独自の性格をもって形成されたのであろうか。両者はいかなる要因によって分裂的に形成されたのか、その際いかなる要因が両者のコミュニケーション疎外をもたらしたのか。「マルクス主義」フェミニズムは『第二の性』をいかに継承し、あるいは継承しなかったのか。これらの問題を念頭に置きつつ、ミッチェルとベンストンの所説を検討しよう。

ミッチェル『女性の地位』(邦訳『女性論 性と社会主義』)は、60年代の女性解放運動(women's liberation movement)と解放理論史を取りあげた第一部と女性抑圧の構造的検討を行った第二部から成るが、1966年の論文の中で発表され、合衆国のフェミニズム理論の形成に影響を与えた第二部第5章(「女性の位置 1」)と第7章(「女性の位置 3」)を中心に検討しよう¹⁾。基本的論旨は次の通りである。

女性の抑圧を解明するためには、従来の社会主義理論が前提している「家族」というイデオロギーに規定された諸構造を分解し、諸構造の「重層的決定」(アルチュセール)²⁾のあり方が検討されなければならない。女性の状態を規定する要素は、生産、再生産(生殖)、セクシュアリティ³⁾、子供の社会化の四つの構造であり、その複合的統一体によって抑圧されている。

「生産」において女性は生産の重要部門から排除され、膨大な家事労働を

負担している。これは主として暴力を含めたイデオロギー的強制 (政治的関係) による。

「再生産 (生殖)」における女性の役割は、出産という身体要因よりは、生殖が生産における男性の役割の「代償物」になったという精神的要因が大きい。

「セクシュアリティ」の面では、女性は古代から現代まで抑圧されてきた。それは家父長制が資本主義的生産様式によって継承・維持されているからである。現代における婚姻制度は形式的平等と実質的不平等という矛盾をかかえている。現代では生殖からの性の分離によるその自由化が進展しており、セクシュアリティは四つの構造のうちの「弱い環」となっている。

「子供の社会化」(育児) は、生物学的要因ではなく、文化的要因によって女性に割当てられており、これが幼児期における女性の人格形成に決定的な役割を果たしている。

「現代の家族は、性的、再生産的、社会化機能 (女性の世界) という三枚続きの絵が、生産 (男性の世界) によって抱擁されたものとみることができ……最終的次元においては経済によって決定される構造である。」⁴⁾

女性解放のためには経済要求に、他の三つの要素の諸政策が組み合わされなければならないが、特定の状況ではその一つが優先されることもある。

以上の所説は、「土台」、「上部構造」という用語の使用を回避しているが、「遺制」としてのイデオロギー的上部構造の独自の堅固さをもつ諸「審級」を前提した「重層的決定」というアルチュセールの「史的唯物論」の女性解放理論への大胆な導入である⁵⁾。しかし、見られるように、このような「史的唯物論」の場合、「土台 (下部構造)」と「上部構造」という概念を転倒させ、性革命の課題を優先させさえすれば、ミレットの所説にきわめて近いものになる。ここではこのようなミッチェルの所説の特質を指摘するだけにとどめて、ベNSTONの所説の検討を行おう。

ベNSTON「女性解放の経済学」は短い論文ではあるが、「マルクス主義」

フェミニズムの理論史の「枠組み」を整理した古田前掲論文によれば、ミッチェルの所説との対極をなすものと位置づけられ、その後の「マルクス主義」フェミニズムに継承される重要な論点を含んでいる。ベンストンの所説の要旨は次の通りである。

従来の階級構造分析では「女性問題」が無視されているが、それは生産手段との関係で階級規定する際に、女性の生産手段にたいする独自の関係が無視されているからである。エルネスト・マンデルがプロレタリアートの階級規定に用いた生産手段または生活手段へのアクセスの欠如という一般規定を、女性の地位規定として具体化する必要があるが、その際資本主義社会に現存する自家用使用価値生産者（農民他）の概念は、女性が担っている家事労働に適用可能である。商品生産の出現による人々（men）の労働様式と社会組織様式の根本的転換というマンデルのテーゼ⁶は、人々を「男性」と読み替えることにより、女性が担っている社会的に必要な大量の使用価値生産（育児を含む家事労働）の性格を規定することができる。

女性の地位を規定する家事労働は、語の真の意味での「前資本主義的生産」として、農奴制に類似したものであり、これが生産における男女の異なった関係を規定している。群としての女性は、貨幣経済の外部の労働に責任を負っており、このことが女性の労働を貨幣的に無価値な労働としているが、群としての男性は交換価値生産的労働に責任を負っている。資本は男性労働にたいする賃金によって二人分の労働を購入し、それによって消費単位としての家族を維持している。この男女関係が女性の経済的従属を規定し、この従属が女性特有のパーソナリティ（感情的従属、受動性等）として反映されている。

女性労働力は、労働力不足の際には市場経済に導入され、過剰の際には排出されるという産業予備軍であり、女性は家事労働と世帯外労働との二重責任を負わされている。

したがって女性解放は、女性の産業的労働への参加のみによっては達成さ

れない。女性運動を通じて、無償労働としての女性の労働搾取の利用効率を低下させ、資本主義下では全面化は不可能ではあるが、家事労働の多様な形態での産業化を促進し、生産における構造変化が可能な社会への転換——革命——を促進すること、これが女性解放運動の課題である。

以上の所説は、ミッチェルの上部構造的遺制としての「家父長制」論にたいする土台論からの批判であり、「家父長制」用語こそ用いられていないが、家事労働を農奴制に類似した「前資本主義的生産」と規定することでその「物質的基礎」を説明するものとなっている。ここで両者の相違を詳細に検討することは、史的唯物論にかんするアルチュセールとマンデルの論争のミッチェルとベンストンによる「代理戦争」論になりかねないのでさしひかえよう⁷⁾。むしろ両者に共通する特質を両者のフェミニズム理論の性格として取り出そう。『第二の性』および「ラディカル」フェミニズムと比較すれば、両者には次のような共通の特質がある。

第一に、性差別を土台論として検討する際、家事労働を基礎として考察していること、家事労働を、後にあらわれた一部の「マルクス主義」フェミニズム理論のような労働力商品「生産」的労働という論理⁸⁾には立たず、物的使用価値生産労働すなわち土地自然的関係行為として理解していること。これは『第二の性』の家事労働観の継承であり、『資本論』の労働過程論の継承・発展である⁹⁾。

第二に、家事労働の存在を「土台」視点から解明したとしても、それがなぜ主として女性に担われるのかという点について、両者とも「土台」視点からの明確な根拠が欠如していること、とくに女性が自己の労働能力の完全な「所有」主体であるか否かという「土台」視点からの検討が欠落していることである。

第三に、マルクス主義的「史的唯物論」の根本的再構成として『第二の性』や「ラディカル」フェミニズムが提起した両性の社会的行動差を規定する「土台」としてのセクシュアリティ（性・生殖様式）という論点にたいし、

十分な内在的検討が欠如していることである。

第四に、とくにベNSTONにかかわる問題であるが、主婦労働としての家事労働の特質として『第二の性』で指摘されている他者の全人格に関連した労働の「待機性」的特質、および市場での生活手段販売時間にたいする購入労働時間の適合理化としての市場適合的の特質という「前資本主義」的小規模生産には見られない労働特質¹⁰⁾の検討が欠落していることである。

第五に、「ラディカル」フェミニズムとも共通する特質であるが、キンゼイやマスターズの男性的性言説の批判的検討が欠如していることである¹¹⁾。

以上の理論の全体的な特質は性・生殖的契機の「土台」論への導入を否定したものとして、「労働論的史的唯物論」の継承とその部分修正となっていることである。

『第二の性』の家事労働視点からすれば、第二～第四の問題点は内的に関連した問題である。ボーヴォワールは、ミッチェルの著書を評して、家事労働の女性への強制（「家父長制」）と資本主義的抑圧との関係についての問題を提起はしたが、それを解決していないと指摘しているが¹²⁾、この指摘はベNSTONにも同様にあてはまる。

第二の問題点とかかわって、ベNSTONの場合は『第二の性』、ミッチェルの場合には『第二の性』とファイアストーンの問題提起を受けとめることができなかつた潜在的要因は何であろうか¹³⁾。そこには、第五の共通特質と関連して、「性（セクシュアリティ）」および「性革命」ということばの理解にかかわるコミュニケーション疎外が伏在していたと思われる。

ミッチェルは、「性革命」の意義を留保条件つきで認めるが、その「土台」としての変革力は認めていない。

ベNSTONの場合、「性革命」にたいする肯定的な言及は全く見られない。むしろミッチェルの上部構造論の批判や『第二の性』の完全な「無視」という態度からうかがえるように、セクシュアリティと女性解放との関連性についての考察を行うという姿勢自体が欠如している。この態度は、旧来の階級

構造論批判からもうかがえるように、何らかの硬直した党派的態度が決定的要因になったとは考えにくい。むしろ性の現状にたいする根本的な批判的問題意識自体が欠如し、現状の性を「生物学的自然」と捉えるか、「性そのもの」のあり方は歴史的に解決済みの問題と捉え、社会科学的検討の対象外としたと見れば合理的な説明がつく。

ミレット、ファイアストーン、ミッチェル、ベンストンの四者に共通していることは、20世紀の男性的性言説にたいするボーヴォワール的な根本的批判と、引用文⑩のような性の歴史性にかんする深い直観的洞察の欠如である。四者は、ボーヴォワールの洞察を前進させるための性の歴史の批判的検討を行わないまま、「性」をそれぞれ異なった内容と次元で捉えている。このことが結果的に社会構造認識にかんするコミュニケーション疎外の根本的要因になったと言える。

「ラディカル」フェミニズムと「マルクス主義」フェミニズムは、60年代後半の合衆国およびイギリスの社会状況と新しい女性解放運動の中から¹⁴⁾、マルクス＝エンゲルスの「史的唯物論」と『第二の性』を理論的前提としながら誕生した。しかし両者は誕生の当初から分裂的に形成された。これは「セクシュアリティ」にかんする『第二の性』との共通認識の欠如の結果であり、そこにはマスターズらを含む男性的性「神話」がコミュニケーション疎外の根本要因として作用していたと言える。

[次号に続く]

[注]

- 1) ミッチェル前掲論文は両派の論争の焦点となった。ミッチェル前掲書（付録），257ページ。
- 2) ルイ・アルチュセール『マルクスのために』平凡社，1994年（原書1965年），165ページ。
- 3) 訳文は「性欲」であるが，原語はsexualityである。Mitchell, *op. cit.*, p.101.
- 4) ミッチェル前掲書，180-181ページ，Mitchell, *op. cit.*, p.148.（訳文一部変更）
- 5) アルチュセール前掲書，164-190ページ。なお森田前掲書（34-35ページ）で

は、「家父長制」概念が「ラディカル」フェミニズムから1974年のミッチェル前掲著作に導入されたとされているが、むしろミッチェルの1966年論文から「ラディカル」フェミニズムに継承されたとすべきである（*Women: The Longest Revolution*, p. 24）。また現代社会における「家父長制」という問題構成は『第二の性』I巻第二部「歴史」自体にもある（193ページ, Beauvoir, *op. cit.*, I, p. 223; Beauvoir, *op. cit.*, ed. Parshley, p. 164）。

- 6) Ernest Mandel, *An Introduction to Marxist Economic Theory*, New York, 1967. なおマンデルの報告ペーパーも使われている。
- 7) 後に、マンデルはアルチュセールを批判するとともに、家事労働にかんしてベנסトンと共通する理解を示している。エルネスト・マンデル『後期資本主義』柘植書房、1980年（原書1972年）、I, 22-26ページ, II, 203-207ページ。
- 8) 古田前掲書、36-37ページ。マルクスの基礎カテゴリー（「使用価値」、「価値」、「剰余価値」）を前提するかぎり、この理論は根本的難点を孕んでいるが、これは第二編で検討する。
- 9) これは第二編で検討する。
- 10) 「前資本主義的」小規模生産とくに家族的農民経営における「性別分業」は両性の協業を基礎としたものであるが、家事労働にはそれが欠落している。
- 11) ベנסトンは、マスターズ報告については全く触れず、ミッチェルはマスターズ報告の批判的検討なしにそれに同調している（前掲書、201-202ページ）。
- 12) シュヴァルツァー前掲書、47-48ページ。
- 13) ミッチェルはファイアーストーンの「生物学」ということばにとらわれて、十分な内在的検討を行わないまま「二元論」と批判し（前掲書、103-109ページ）、ベנסトンは女性の第二位的地位の指摘に際して、『第二の性』を「無視」して一切の論評を行わず、Marlene Dixonの1940年の論文‘Secondary Social Status of Women’のみを引用している。
- 14) ミッチェル前掲書、13-75ページ、前掲『女たちから女たちへ』、151-216ページ。